

鳥学ニュース

No.27

1988年5月31日

試行錯誤を重ねた京都鴨川でのユリカモメの餌づけ

大 槻 史 郎

このところ、私の家には翼を骨折したユリカモメが、多い時は8羽、現在でも4羽、保護飼育されている。これらは市民に保護され、私のところに届けられたもので、これから、いま鴨川が飛行中に事故を起こすほどの超過密なユリカモメの生息地であり、また、ユリカモメが市民に憩いの好伴侶として愛されていることが分ると思う。

だが15年前、私がユリカモメに餌付けを始めた時はそうではなかった。私はだし^{じやと}雑魚や粉塗などのだしがら、天麩羅^{てんぷら}の^か殻、おからなどを餌材としてユリカモメの反応を見ようとした。当時は、ユリカモメが一体どこから飛来するのかも分らず、羽数も極めて少く、探すのも一苦労だった。従って考え出した餌材も結局実用的でなかった。そこで、我が家のお節料理用の田作^{たせ}やちりめん雑魚を失敬し、まず標的を採餌能力に劣る若鳥に向けることにした。ところが、これらの餌材は軽すぎて狙う鳥まで届かず、水中に沈むばかりであった。軽くて動かないものは餌として不相当と分り、じょうぶなドジョウ^{どじょう}がよかろうとこれに決めた。こうしてドジョウは私のユリカモメ餌付けの主役となった。

そこで、鴨川の中州の近くに待機して、若鳥が飛んできたら一発必中のミサイル餌付けで、ドジョウを投げることを考えた。待つ甲斐あって鳥が来て「いざ」という時になったが、ぬらりくらりと逃げられ、ドジョウつかみがままならず、残念にもチャンス逃してしまった。すると、それではと、耳よりの話をする人がいて、握り下手なら鳥が来た時、「一、二の三」とお椀でドジョウをすくって、中州へまけというわけだ。ドジョウはびっくり仰天してはいまわったが、鳥がUターンしてもたついている間に、子供に爆竹を鳴らされ、これまた失敗した。こうなると執念で、私はそのつぎの日も襲来した寒波のなかで、双眼鏡とドジョウを持つ手が凍るほど頑張ったが、鳥はこず、腹は空くやうで、つい護岸の石垣から足を滑らせ氷のような川へ転び落ちた。



1日に2～3回、計30kg給餌する。その調達、給餌、記録となかなかたいへん。

だが、餌付けの失敗が続くなかでも、羽数の増加につれて若鳥がふえ、私のいる御霊橋にも時折り飛来するような変化が見られだした。

そんなある日、弁当の蒲鉾を口に入れていて名案を思いついた。ユリカモメは鴨川で採餌と休息を繰り返す、獲物は空からと水上とで探すため、この蒲鉾板にいま一度ドジョウを載せ、上流から鳥の群の中へ流すという手である。いかにも漫画的で、珍無類な発想と見えるだろうが、私の考えぬいた真面目な切り札だった。人の気配の少い朝、鳥の様子を見届けて、私は蒲鉾板作戦に入った。その時、

顔見知りの少し血の巡りの悪い若者が現れ、蒲鉾板を競艇場へ行ったつもりで応援をやりだした。たびたびの失敗に神経質になりすぎていたが、それに対して大声もあげられず無念の中止となった。

だが、そうしたなかで、鳥が驚いて飛びたなかつたのは、人や車やらが交錯する生息環境になれてきたためだった。この新しい動向に気づいたことで私は餌付けに自信を持った。

かくて、私は決意も新たに蒲鉾板作戦を絶対人に気付かれない御園橋の橋下でやることにし、成功を期してドジョウも小イワシに替えた。トビ、カラスにも気をつけ、ユリカモメの動きを双眼鏡で読みながら、水の流れ方、風向きも勘案して、小イワシを載せた蒲鉾板を流した。ユリカモメの声のテープも流し様子を見た。そして、試行錯誤を重ねてたどりついた蒲鉾板作戦の数枚に、ついに三羽の鳥が接近した。息を呑んで見まもる私の胸は高鳴り、手足はふるえた。だが、鳥は蒲鉾板を遠まきにし、やがてまた、こともなげに散っていった。

ほのかな曙光を見たかにみえたが、しだいにそれは暗いほとぼりとなって消え、ここで私は、人間の考えだす浅薄単純な思慮では、鳥の叡智を計り知ることが出来ないことを知ったのである。自然に生きるユリカモメに、ありふれた餌付け心でパン屑を与え、念願の餌付けに成功したのは、それから遠くはなかった。

——特集・失敗に学ぶ—— 経験雑記帳

「経験は失敗の別名」とは、だれだったか忘れましたが、有名な作家のことばです。みんな失敗ばかりして、だんだん賢くなってゆきます。失敗をした直後には、それを他人に話す気にはとうていなれなくても、しばらく時間がたつと、貴重な経験としてはっきりと記憶していることに気がつきます。今だから話す失敗談やそれから学んだ教訓などは、ふつつ記録されることはありません。しかし、いつも、どこかで、だれかが同じような失敗をくりかえしているにちがいないのです。今回はそんな失敗談（決して笑うことができない）を語ってもらいました。これらのなかには小さな知恵が集められています。いま野外調査の真最中。それに少しでも役立てばと思います。

1. 標識調査のためのガン捕獲

宮城県内でガンの標識調査を始めた頃の話である。標識をつけるためにはガンを捕獲しなければならぬが、これが大変難しい。その方法について試行錯誤をくり返した時期があった（これは現在も十分には解決されていない問題なのだ）。

捕獲道具は、山階鳥類研究所から借用したロケットネットが使えるようになり、この問題は解決した。次の問題は網場までどうやってガンをおびき寄せるかということだった。ガンは餌付けが難しいので他の方法を考える必要があった。まず考えたのはデコイ（発泡スチロール製で、採食の姿をしたもの）で、それを網場周辺に置いた。これはある程度の効果があり、上空に飛んできた群れ（ヒシクイ）はデコイの近くに降りるようになった。しかし網場の範囲にまでガンを導くには不十分だった。

次に使ったのが、生きたひとり囮だった。ガンの猟法で囮を使うものは多く、その効果は実証されていた。仙台市八木山動物公園で飼育中のヒシクイ2羽（県内で保護されたもの）を借り、これを網場のそばにつなぎ、野生の群れの飛来を待った。間もなく数十羽のヒシクイが現れ網場上空にさしかかった。私たちの筋書では、地上の囮と上空の群れが鳴き交わし、囮につられて網場に降りた群れを、ロケットネットで捕獲するという手順になっていた。しかし予期せぬことがおきた。それまで首を立て、次第に近づくガン群を見すえていた2羽の囮は、頭上に群れがやってくると、ペタッと地上にひれ伏してしまった。そして群れが通過したのを確認してから再び立ち上り、何事もなかったかのように餌を食べ始めた。長期間飼育されていたためか、囮たちは自分がガンであることを忘れ、かつての仲間を外敵と思うようになっていたのだ。囮を使う時

は十分な訓練が必要なことを、この時、囃たちに教えられた。(呉地正行)

2. 卵の破損防止法

繁殖中のコアジサシやシロチドリ成鳥を標識するために捕獲する場合、カゴ型のトラップは有効です。親鳥が抱卵すると卵の上に張った糸が引張られ、自動的にカゴを支えていた棒がはずれ、カゴがかぶさる方法や、巣の上に最初からカゴをかぶせ、ロート状の入口を一方に開けたもの(カニカゴ式)がある。いずれの方法でも、抱卵後期であればかなりの確率で成鳥を捕獲することができる。

ところが、捕獲されたカゴにかけつけてみると、中であばれた成鳥が、翼などで卵を傷つけることがある。コアジサシで数例経験した。それを防止するには、トラップをセットする時に、卵を偽卵と交換すれば良い。実際にはウズラの卵を用いるのが簡単(卵はゆでておいた方が無難)。以来事故はゼロ。もちろん元の卵をもどしておくことを忘れないように。(尾崎清明)

3. 小鳥の卵に印をつける方法

小鳥の卵の殻はごく薄くてもろく、研究のために産卵順などの印をつける時、細心の注意を払っても過って小さなへこみをつけたり、傷をつけたりしてしまうことがよくある。私は即乾性の油性フェルトペンを用いていたが、卵殻の表面にうすく脂がついているためか、うまく印がつかなくなったり、また転卵の時にこすれて印がかすれ、うすくなってしまうこともあった。それで、卵の鈍端部に印をつけた。ほかの人がどんな工夫をしているかと思って、あとできいてみると、軟い鉛筆(3B、4Bなど)のしんを丸くして、そっと書き、その上に透明なマニキュアでコーティングするとよい、ということだった。マニキュアには色も豊富だから、この組み合わせで印をつけることもできるだろう。なお、私の経験では卵のへこみにセロテープをはったら、その卵は無事孵化した。

(長谷川 博)

4. ヘビにセッカを取られた話

他人様に学んでもらうほどの“役に立つ失敗”は残念ながら何もしていないが、セッカを捕獲している最中にあやまってセッカを殺してしまったことが2回ある。そのどちらも巣についているメスを捕らえようとカスミ網を張って、そのヒマにちょっと隣のセッカを観察していた時に起こった。

まず最初の例では網を張ってしばらくして戻ってみると、何か長いものがぶらさがっているのかと思ったら、なんとシマヘビが口いっぱい何かを頬張って、下から2段目のタナにぶらさがっているではないか。「しまった」と思ったが後の祭り。捕らえようとしていたセッカのメスはシマヘビの口の中だった。もう1回も同様の状況で、今度はネコイタチにやられたらしく、戻った時にはこと切れていた。

捕獲中に他のことができるからといって、欲を出して、目的の鳥をヘビやイタチにさらわれてしまっては元も子もない。それ以来、捕獲は真面目にやるようになった。

(上田恵介)

5. 網にかかったシジュウカラを

モズに殺られた

カスミ網にかかったシジュウカラをモズに殺されてしまったことがある。この時モズは、カスミ網のすぐそばに伸びていた枝にとまって攻撃した。その前にかかったコゲラを測定しているほんの10分足らずの間のできごとであった。ネコイタチなどによる下からの攻撃だけでなく、横からの攻撃の危険性も最小にするために、カスミ網のすぐそばに伸びている枝などにも注意しなければならないことを学んだ。

(石田 健)

[次号予告]

特集・グループ活動

各地の鳥類研究のグループを紹介します。

6. アオゲラの巣放棄

観察中のアオゲラの2巣が放棄された。初め2~3日間に卵数確認のためと、10日おいてから孵化と抱卵確認のために鏡と豆ランプを使って中をのぞいた。1巣は、地上30cmにあり時期も遅く、親が特に神経質だった可能性もある。もう1巣は、地上1.5mにあり、途中で卵が1つ減り、1日カメラマンが撮影を試みたらしい。私の観察以外の営巣妨害があったためかも知れない。アカゲラに比べて、アオゲラは神経質だと印象をもった。(ただし、昨年東京都練馬区の石神井公園では、人通りの多い道の側で雛が巣立っている。)

(石田 健)

7. コゲラの雛飛び出し

研究を始めたばかりの頃、棒の先に付けた小さな鏡を、雛数確認のときに巢中へ落とししてしまった。30分ほど様子を見ても、親も来ず雛も黙ったままだったので、鏡を取り除かなければと考えて、巢の後ろに穴を開けて取り出したところ、後で雛が出てしまった。(幸い巣立ち間近だったので、2羽の雛は無事に飛び回っていた。)後から考えると、多少の異物を巢中に落としてしまってもそのままにしておいた方がよかった。(石田 健)

8. 巢内のひなに足環づけをする日齢

小鳥のひなにどの発育段階で足環標識をしたらよいか、初め迷うにちがいない。孵化後まもなくだと小さすぎてつけることができないのは当然だが、また巣立ち近くなると触れただけでひながいっせいに巣からとび出してしまふことがある。私は以前にキセキレイで孵化後数日たった時、足が大きくなったからよいだらうと思って、個体識別のために足環をつけた。巣にもどってきた親を観察していると、足環をくわえて必死にそれを巢外に運び出そうとしていた。そのままではひなが巢外にひっぱり出されそうになったので、あわててそれを止めさせ、足環をフェルトペンで目立たないようにぬってその場をしおいた。こんな経験から、ひなが体温

調節ができるようになってから(夜、親が巣にとどまらなくなる)足環をつければ安全であることを知った。(長谷川 博)

9. カラーリング選びは慎重に

私は、1976年以来、カワウをカラーリングで個体識別して戸籍作りをしている。そして、調査ファイルを開くたびに、今なお「もし、あのときに」と思うことがある。

カワウ用のカラーリングとして、ビニール被覆銅線(「鳥学ニュース」64)を利用している。このリングは丈夫で、多数の色の組合せが作れるが、リングが細くて識別に注意が必要なことや、リング作製と装着に多少手間がかかる。そのため、何かもっといいものはないかと考え、塩化ビニールの薄板でリングを作り、試験的につけてみた。このリングは製造・装着ともより簡単で、はるかに識別しやすいものだった。そして1年後でも損傷がなかったことを確認し、77年から78年にかけて、129羽にこのリングを装着した。ところが1年を過ぎた頃から次々と脱落し始め、数年の内にほとんどが消失してしまった。そしてこの年代の戸籍にポッカリと大穴をあけてしまった。年齢と各種の成績の関係をみることも、大きいテーマの一つなので、当然年齢が増すにつれて生残個体が減ることから、この穴の存在は年々大きくなってきている。

脱落の原因は、塩ビリングが次第にもろくなり、衝撃が加わると割れてしまうためであった。冬季に脱落が多かったことから、低温時にもろさが増すようだ。そしてさらに予想外だったことは、カワウがそれだけよく足首部分を何かにぶっつけているということであった。鳥でも、カワウのような大きい鳥になるとそうスマートに生活しているわけではないようだ。また雌鳥のほうがリングが長く残っていたので(1羽の雌は9年半後の現在なおついている)、それだけ雄鳥は活動量が多く、雛に暮らしているようである。

リングを使い個体識別する場合は、対象鳥や調査条件などから、リングの種類をよく検

討しないと後で後悔することになるだろう。特に、長生きする鳥で長期間調査する場合は、リング選定が重要な条件となる。

(福田道雄)

10. 三脚のかわりに「まくら」を

野外調査に重い三脚を持ち歩くのはつらい。そのためなるべく軽い小型の三脚を用意したり、いっそうのこと持ってゆかなかったりすることも多い。そんな時、望遠鏡や望遠レンズを使わなければならなくなり、しまったと思うことがよくある。こんな時役立つのは「まくら」である。スポンジ入りの弾力性のあるものではなく、ソバ殻などのように自由に形を変えられるものがよい。大きいと重いから小さめのほうがよいだろう。どんな土台の上にも置き、望遠鏡をしっかりと固定してくれる。車のドアの窓に置いても効果は絶大(米子市の安田亘之さんの経験)。現場で布袋に砂をつめて即席に「土囊^{どのお}」をつくることもできるだろう。(長谷川 博)

11. シリカゲル(乾燥剤)の利用

カメラや照度計、サーミスター温度計など電子回路をもつ精密機器は、雨や湿気にきわめて弱く、野外調査にもっていっておかしくなった時には非常に苛立つ。これに対する策はシリカゲルを携行することである。フリーザーバッグ(冷凍保存用)やストックバッグ(保存冷蔵用)などジッパーつきのビニル袋に機器とシリカゲルを入れておけばまもなく機能回復する(湿気によるショートがなくなる)。湿気を吸ったシリカゲルは熱すれば再生する。シリカゲルは1ピン500円くらいで、薬品店で買える。

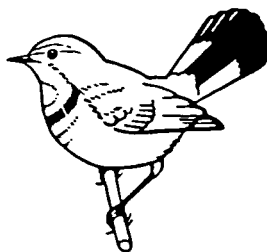
厚手のビニルでできたフリーザーバッグは非常に丈夫で(たとえばリードのもの、スーパーで売っている。大きさもいろいろある。)、いろいろのものの防水に便利だ(もちろんこの逆にも使える、水漏れ防止に)。

(長谷川 博)

12. コンピュータの生データを失う

データファイルなどは、必ずバックアップ

をとるようにしているが、特に注意を要するのが生データである。観察の最中に携帯型のパソコンを利用して直接入力するときには、携帯パソコンから机上パソコン、さらにフロッピーディスクに転送し、そのデータを使いやすく変形する段階までが特に慎重を要する。次の観察に移る前に急いで処理するために、いくつかの操作を自動的に行うようにして、その中でうっかり「余分なファイルをすぐに消す」命令を入れておいたところ、操作の途中でディスクが満杯になり、変形・移し替えのファイルができていないのに元のファイルを消してしまい、データを失ったことがある。確認しながら進められるように操作手順を決めておく必要を、改めて感じた。(石田 健)



今年からドイツ鳥学会の「鳥学雑誌」の表紙に登場した鳥。さて、この鳥の種名は?

原稿募集

わたしたち2人の博が、この「鳥学ニュース」を編集するようになって、早くも満5年が経過しました。2年前からは年1回、特集の部分だけ、ほかのかたに編集の協力をお願いしています。野外調査の合間に編集の作業をするので、準備不足も否めません。またマンネリズムにおちいつているかもしれません。「鳥学ニュース」を新鮮にするのは、会員のみなさまからの寄稿や意見です。どんなことでもかまいません。編集部にぜひ原稿を。

原稿は横書き、B5判かA4判20字20行(400字詰)。ワードプロセッサによる原稿も歓迎します。できれば1行20字で印字を。

Movement

第1回 国際鳥学セミナーの予告

前号の鳥学ニュースでお知らせした第1回国際鳥学セミナーの予定が、本年10月24日から10月31日の間に、ほぼ決まりました。この間に、大阪市立大学での2日間のワークショップ、京都、東京、そのほか1都市でのモック教授の公開講演、その他の行事を行ないます。

大阪市立大でのワークショップは、招待講師のモック教授の専門分野を考慮して、鳥類の生態・社会・行動学を中心課題とし、10月24日(月)に鳥類の「親による保育」を中心とした研究発表が、また10月26日(水)にわが国の最近の研究発表が行なわれます。

公開講演は10月25日(火)に京都大学で、10月29日(土)に東京で開かれる予定ですが、他の1か所は未定です。

ワークショップ参加申し込みについて

上記のワークショップ参加希望者を募ります。研究発表は生態・社会・行動学に関するもので、すべて英語で行ないます。ただし、通訳が1人待機していますので、英語に自信のない人も歓迎します。参加申し込みおよびワークショップに関する問い合わせは〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部生物学教室 山岸哲まで(電話06-605-2584 直通)。参加申し込みの締め切りは6月30日。なお、人数の関係で参加者を整理させて頂く場合がありますから、ご了承下さい。

モック教授の公開講演は通訳付きです。演題・会場その他は未定ですが、大きな会場を予定していますので、なるべく多数の方の参加を希望します。(森岡弘之・山岸 哲)

「カッコウと宿主の相互進化」に関するシンポジウムのお知らせ

津戸基金が設立されたのにあたり、この基金の利子を利用して、シンポジウムを開催することになりました。これは鳥学会大会の折のシンポジウムとは別に毎年1回行うものです。今年度は、その1回目ということで、上記のテーマで行ないます。

カッコウは、さまざまな種類の鳥に托卵する性質をしていますが、日本ではここ10数年の間に、オナガとの間に新たな托卵関係が成立しました。これは、最近両者がともに分布を広げ、分布が重なり合ったためです。その結果、地域によってはオナガへのカッコウの托卵率が7割に達するほどの異常な状態が現在進行中です。この原因は、新しい宿主であるオナガは、古くからの宿主の場合と異なり、カッコウの托卵に対する対抗手段をまだ十分持っていないからです。しかし、ごく短期間にもかかわらず、托卵歴の長い地域のオナガは、カッコウに対する攻撃性や、カッコウ卵のみを取り除くといった形での対抗手段を確立しつつあります。

今回のシンポジウムのねらいは、現在各地でカッコウやカッコウの宿主にあたる鳥を調査している研究者が集り、各地での両者の現状について発表し合い、カッコウと宿主の相互進化に関する論議を深めることです。

つぎの要領で計画していますので、参加希望者は連絡下さい。詳細については、参加希望された方に追って連絡いたします。

日 時 1988年10月1日(土)～3日(月)
場 所 長野県・軽井沢、または、戸隠高原を予定

申し込み〆切り 7月30日

申し込み先 〒380 長野市西長野
(問い合わせ先) 信大教育学部 中村浩志
☎ 0262-32-8106(内線361)

第20回国際鳥学会議の

プログラム ほぼ決まる。

1990年12月にニュージーランドのクライストチャーチで開催される次回国際鳥学会議のプログラムがほぼ決まった。昨年11月にプログラム委員会が開かれ、会議を構成するシンポジウムとそのコンヴェンナーが固まり、それぞれのシンポジウムの組み立てが始められている。

Sibleyによる会長講演のほか、協同繁殖や応用鳥学、鳥卵生理学、海鳥の生態について特別講演があり、ほか48のシンポジウム(分科会)が予定されている。シンポジウム題目のリストを希望する人は 正富宏之氏 へ (〒079-01 美唄市光珠内 専修大学北海道短期大学)。

学術シンポジウム

「三宅島の自然と環境」案内

日時：1988年6月11日(土) 14.00-17.00時
場所：明治大学(駿河台校舎)6号館622号教室。JR・丸の内線「お茶の水」、千代田線「新お茶の水」下車、徒歩5分。
日本地質学会三宅島問題小委員会、日本野鳥の会、自治体問題研究所、日本科学者会議などの学協会から報告が予定されている。

XIX Congress of International Union of Game Biologistsの予告

上記の国際会議は、本年9月8-13日に、ノルウェーの Trondheim で開催されます。ご興味のある方は本会事務局までご連絡下さい。(幹事)

近畿地区懇談会近況

当懇話会も発足以来10年を経過し、記念行事を行うなどますます活発になってきています。1986・1987年度の例会の様子をお知らせします。

第26回例会 1986年3月9日、伊丹市立労働福祉会館。

1. ヤブサメの繁殖システム(大原均氏)、
2. アフリカの鳥(山岸哲氏)、参加21名。

第27回例会 1986年8月23日、大阪市立大学文化交流センター。

1. 生物指標としての鳥類の有効性と限界(山岸哲氏)、
2. 第19回国際鳥学会議に参加して(上田恵介氏・瀬戸淳氏)、参加17名。

第28回例会 1986年11月29日、東山会館(京都)。

1. 京都大学構内のキジバトの生態(和田岳氏)、
2. ムクドリ糞および吐瀉物に含まれる木の実について(橋口大介氏・上田恵介氏)、
3. 短報：ハワイの鳥(伊東輝夫氏)、
4. 短報：コミミズクの貯食行動(中川宗孝氏)、参加21名。

第29回例会 1987年3月21日、伊丹市立労働福祉会館。

1. 雪国のオオヒシクイの行動(阪本周一氏)、
2. ヒシクイの渡りの解説(須川恒氏)、
3. 短報：コミミズクの個体識別(中川宗孝氏)、参加21名。

第30回例会(10周年記念) 1987年6月21日、大阪市立自然史博物館。

1. 鳥島のアホウドリ(映画)、
2. 鳥類におけるホメオスタシス(つりあい)の一般性(黒田長久氏)、参加56名。

第31回例会 1987年12月3-4日、金沢。

1. エナガの協同繁殖について(中村こすも氏)、
2. オオヨシキリ(浦野栄一郎氏)、
3. マガンの採餌地の移動について(山本義雄氏)、
4. カリフォルニアの海鳥研究(Leah de Forest氏)、参加34名。

近畿地区懇談会は年会費500円です。近畿地方在住の鳥学会員のご参加を歓迎します。新しく学会に入られた方のなかには、まだこの会に参加されたことのない方もおられると思いますので、ぜひ事務局までご連絡ください。

なお、次回から事務局が京都(〒606 京都市左京区北白川追分町 京都大学理学部動物学教室 江崎保男・百瀬 浩)に変わりますのでお知らせします。(坂根隆治)

生態学は生物とそれを取りまく環境とのかかわりを研究する学問であるが、そのうちで特に脊椎動物の種内および種間の社会関係を重視した研究をするのが私どもの研究室である。社会関係は動物の行動を通じて把握されることが多いので、動物行動学も駆使される。また、最近の行動生態学（社会生物学）的視点の検討も盛んに行われている。大学院は後期博士課程まで設置されていて学位の取得が可能である。

現在はスタッフ3名（教授・助教授・助手）、後期博士課程7名、前期博士課程1名、学部4回生3名、研究生1名（うち外国人留学生1名）の合計15名の大家族で構成されている。山岸が鳥類を、川道武男が中・小型哺乳類を、幸田正典が魚類を主に材料としてそれぞれ研究を進め指導に当たっているが、山岸は魚類にも興味をもっているし、川道はカモシカ・ニホンザルなどの大型動物やオオサンショウウオ・モリアオガエルを研究する学生の指導にも当たっている。したがって、鳥類だけの視野で動物社会を見るのではなく、常に脊椎動物全体を頭においたディスカッションができるのが当研究室の大きな特質である。また、この分野に関連ある内外の雑誌類はほとんど整っている。

鳥の研究についてやや詳しく紹介するなら、大迫義人君が「セグロセキレイの社会構造」、浦野栄一郎君が「オオヨシキリの一夫多妻制にともなう雌のコスト」、堀田昌伸君が「ヒメアマツバメのつがいの継続性と繁殖成功」、中村雅彦君が「イワヒバリの乱婚社会」、金昌會君が「ダルマエナガの社会構造」、研究生の伊藤信義氏が「クロサギの二型の地理的変異」についてそれぞれ研究を進めている。集団生活の中でも一夫一妻制が維持されやすい鳥類は、ニホンザル・チンパンジー・ゴリラなどの霊長類とは大きく異なっている。動物社会学の目標の一つが「人間とは何か」を考えることにあるとすれば、鳥類の社会の研究はヒトの夫婦や親子関係を知る上で霊長類研究よりかえって大きな示唆を与えてくれることが期待できよう。

卒業生の中からは上田恵介・藤岡正博両君のような新進の研究者が出ており、特に藤岡君は本年度第1回国際鳥学セミナーに招かれるオクラホマ大学のモック氏のもとへ留学中である。御多聞にもれず、就職難は深刻であり（大学院生の構成を見れば一目瞭然！）一番頭を悩ませている問題である。（山岸 哲）

Information

出版物情報

●日本白鳥の会（編）。「白い鳥——ハクチョウとともに40年」（大森常三郎著作集）。4 + 218pp。1987年1月。野生生物情報センター発行。定価1,500円（送料含まず）。

猪苗代湖のハクチョウとその保護、ハクチョウの渡り、形態などについて所収。野生生物情報センター（郵便振替・小樽1-12796）で入手できる。詳細は電話011-737-7841へ。

●都市鳥研究会（編）。「都市に生きる野鳥の生態」。8 + 156pp。1988年2月。都市鳥研究会発行。頒価1,500円。

都市鳥研究会は、都市環境に適応して生息しているカラスやツバメ、スズメを初め、最近になって都市に進出してきたヒヨドリ、キジバト、ハクセキレイ、コゲラ等の生態を精力的に調査してきた。また、都市における人と野鳥との共存を求めて餌台に飛来する鳥の調査も実施してきた。これらの都市鳥の生態を上記のような一冊の本として出版した。他に類書のない貴重な資料が満載されている。1冊につき代金1,800円（郵送料を含む）を、郵便振替（東京5-170266、都市鳥研究会）にて送金すれば入手できる。

詳細は 〒177 練馬区下石神井3-6-43
電話 03-995-7108 山根茂生 まで。

●Madge, S. & Burn, H. 1988. *Wild-fowl: An identification guide to the ducks, geese and swans of the world.* 298 pp. Christopher Helm, London.

ハクチョウ・ガン・カモ類(カモ目) 154種についての識別図鑑。彩色図700以上、分布地図150以上。各種について野外識別のポイント、鳴声、習性、生息場所、分布、個体数などについて簡潔な説明がある。海鳥、シギ・チドリ類につくシリーズ第3番目のもの。19.95ポンド(約7,000円)。

BIRD FILE

大庭照代(神奈川県逗子市)

8年半の英国留学を無事終了し、昨年3月に帰国しました。現在、研究成果やいろいろな経験と知識をどのように役立てるか模索中です。いまでは鳥の鳴声の研究が日本でも増え、録音物の出版はアメリカと西ドイツに並び、技術の進歩によって野生音収録の機会は一般にまで拡大されています。研究者も一般の人でも利用できる動物の音声専門の博物館(サウンド・ミュージアム)が、そろそろ日本にできていいのではないかと気負っています。海外にある同じような機関との協力は刺激になるはず。鳥学会のみならずの知恵と助力をお願いしたいと思います。

山岸 哲(大阪市住吉区)

昨年の7月から12月まで、アフリカはタンガニーカ湖の北西端ウラビにある、ザイール国科学省ウビラ研究所に滞在し、スキューバをつけて湖に潜水し、シクリッドフィッシュの社会の研究に取り組みました。5年前にもここで6か月間滞在し、口のなかで稚魚を育てる魚の社会を研究しました。今度の相手は*Julidochromis marlieri*という魚で、雌雄の大きさが逆転し、一妻多夫の社会をもち、ヘルパーまでついているという非常に興味深い種でした。魚はすべてが見えるという点、また採集が可能だという点が鳥と大変異なる所でしょう。

●新浜倶楽部(編)。「新浜の鳥、1966年～1968年の記録」258pp. 1988年4月。新浜倶楽部発行。

東京湾の最奥部、江戸川と江戸川放水路で挟まれた一帯は、現在は浦安市で住宅地となっているが、以前には広大な河口域干潟が残っていて、シギ・チドリ類の採鳥地だった。1966年1月から68年12月まで、114回、14人による共同調査の結果が20年を経てこのほどまとめられた。問合せは、〒180武蔵野市境南町4-13-4 宇山大樹方「新浜倶楽部」へ。

短 信

最近届いたたよりの一部をここに紹介します。(編集部)

樋口広芳(東京都渋谷区)

3月下旬に、2年間にわたるアメリカ合衆国、ミシガン大学での留学生生活を終えて無事帰国しました。東京大学は3月で辞職し、4月からは日本野鳥の会の研究センターに移りました。ここでは、国内およびアジア近隣諸国での鳥類研究、自然保護研究の促進にかかわる仕事に主につくことになっています。これからは、これまでとは少し違ったやり方で研究を続けることになるかと思われませんが、これまでの経験をいかして大いにがんばりたいと思っています。

川路則友(茨城県茎崎町)

今年の4月から、農林水産省林業試験場保護部、鳥獣第二研究室に勤務することになりました。これから野生鳥獣の保護管理に関する基礎研究に従事することになります。みなさまどうぞよろしくお願いいたします。

綿貫 豊(東京都板橋区)

昨年12月から国立極地研究所寒冷生物部門に助手として勤務しています。これからは広く極域生物の研究に関わり、一層の努力を重ねたいと思っています。どうかよろしく。

我孫子でお会いしましょう —1988年度鳥学会大会—

今年度は千葉県我孫子市で日本鳥学会大会を開催することになりました。次号で参加申し込み方法など通知しますが、ここでは今年度の大会のアウトラインを紹介します。いまから発表の準備をお願いします。

会期：1988年11月19日(土) - 20日(日)、会場：我孫子市民会館。

〈一般講演〉開催地が東京に近いので発表参加者が多いことが予想され、また、会場の都合で開会時間を例年に比べて遅くせざるをえず、一般講演の発表時間を質問を含めて15分に短縮する可能性があります。〈ポスター発表〉広いロビーで、第1日目の午後にセットしますので、積極的にポスター発表を。〈フィルム発表〉会場の施設の関係で16ミリのみ使用可能です。なお、ポスター会場に家庭用テレビを1台用意しますのでビデオ発表も可。また、パーソナル・コンピュータ(9801 vm)もセットできますので活用して下さい。〈シンポジウム(案)〉沼の鳥類の現状と保護—特に水質汚濁に関連して。〈採鳥会〉11月20日の早朝に手賀沼(我孫子野鳥を守る会協力)で行います。〈見学会〉山階鳥類研究所の見学会(11月20、21日)を予定しています。〈小集会〉少人数の集会を可能にします。

大会事務局：〒270-11 我孫子市高野山 山階鳥類研究所

委員長 吉井 正(0471-82-1107) 事務 杉森文夫(0471-82-1101)

●宛名ラベルについて 学会員の皆さんへの刊行物の発送時、宛名ラベルに会費の納入状況を記入し始めました。その後、発送のたびに何人かの方々からラベル記入内容について問い合わせを受けています。その多くは「納入したが、未納となっている」というものです。そこで宛名ラベルの会費納入状況通知の仕組みについてお知らせします。まず、皆さんが会費を郵便局に振り込みますと、学会の担当幹事に「郵便振替受払通知票」が送られてきます。それまでに1週間から10日かかります。そしておよそ1週間以内にパソコンに新データとして入力されます。現在、会誌とニュースはそれぞれの印刷所で、封筒詰め、ラベル貼りして発送しています。そのため、ラベル貼り作業を先行して行ってもらうように、担当幹事から宛名ラベルを発送予定(これはしばしば遅れる)の1週間くらい前に送ります。

したがって、ラベル記入事項は、刊行物受取時より1ヶ月くらい前のデータによるものとなっています(住所変更など他の連絡事項についてもほぼ同じです)。もし受取時に記入事項と異なっている場合には、次回で変更されているかどうか再確認して下さい。なお、ラベル記載事項の詳細については「鳥学ニュース」№24をごらん下さい。また、学会への送金はできるだけ郵便振込を利用して下さい。振込用紙は郵便局に備えられています。

●1987年度永年会員(40年間会員を継続し、会費免除となる)になられた谷口一夫氏(佐賀県)から、普通会費を継続して納入したいとの申し出がありました。感謝いたします。

(会計幹事：福田道雄)

鳥学ニュース
1988年5月31日発行

No. 27
(会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1
国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599
(電話) 03(364)2311
発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文英社印刷